

J A山形おきたまアスパラガス振興部会は会員約190人。昨年、1億8700万円の販売高を上げ、今年初の2億円突破をとう力が入る。部長で飯豊町萩生の伊藤賢一さん(67)は「植え替えなど、常に先を見据えた戦略と、後継者育成をいかにうまく進めていくかが重要だ」と語る。

J Aグループ山形は、農業所得増大・地域活性化応援プログラム「地域ぐるみによる園芸産地づくり支援事業」で、種苗費用などを支援する。

県内のアスパラガス栽培は、戦後間もない飯豊町手

J A山形おきたまのアスパラガス

ノ子地区で始まった。手ノ子牛(米沢牛)から出る堆肥を使い、開墾地で栽培。耕畜連携の先駆けだった。

1970年代半ばになると、県農業改良普及所の指導で水田のアルカリ化技術を導入し、転作が普及。約20年前からは春取り・夏秋取りの栽培体系が確立し、収穫量がアップした。

アスパラガスは全国的に産地リレーがうまく回っている。春取りは3月までは九州産。その後、桜前線を追うように北上。置賜産は5月上旬から3週間ほど。

7月の北海道産で終わる。J Aの野菜部会長も務め

る伊藤さんは「競合産地もなく、需給バランスが取れて価格も安定している。他の野菜にない優良作物だ」と話す。

規格の高位平準化を図る「おきたま統一共選」で関東を中心に全国に出荷。10ヶ当たり200万円の収益を上げる人も出てきた。それを見て「やってみよう」という若者も出てきた。

収穫量を下げないためには、6年ほどで新植する必要がある。常に圃場(ほじょう)の更新サイクルをにらんだ栽培が課題になる。

飯豊町アスパラガス栽培出荷組合は今年40周年。伊

販売額2億円めざす



アスパラガスを手に出荷基準を確認する生産者(4月下旬、飯豊町で)

藤さんは「将来を見据え、圃場の更新と同時に次の担い手も育てなければ産地は発展できない」と語る。